

同人誌 (2017年6月号)

風 狂

風 狂 の 会

詩

空と海は共にあるのに	金 得永
芭蕉布に芭蕉の花咲く	出雲 筑三
授業参観	高 裕香
夜を思考する人へ	高村 昌憲
懐旧	北岡 善寿
百の足	なべくら ますみ
蛙	原 詩夏至
汀	長尾 雅樹

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（十九）	三浦 逸雄
-------------	-------

エッセイ

ちょっと怖いハナシ	神宮 清志
-----------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（一）	高村 昌憲 訳
----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年5月号）

空と海 共にある世界
入道雲は流れて海へ下り
空の無窮世界を竜宮に
吐き出した泡で伝える

太平洋の大海も湖のごと
さざ波はひたひたと伝える
珊瑚のエメラルドは水彩を描き
ふんわり青い雲白い雲になる

空と海も共にあり
空と大地も共にある
夕焼けに全世界は共にあるのに
人間世界も いつか このようになるのだろう

※本作品の日本語への翻訳は金一男氏による。

琉球王国の斎場御嶽[※]を訪ねた
途中タコライスを食べたくなって
飛び込んだ小さな店はえらく美味だった

店内を飾る芭蕉布には芭蕉の花が咲いている
バナナのような葉も天に伸び伸びして
なんとも微笑ましい

急逝した友の数少ないもち歌の中で
最も情感のあるうたい方ができた歌
それは芭蕉布のうた

歌い終わると
本当はもっといい唄なんだよ
が口癖だった

ゆるやかに時はながれ
タコライスをまぜこぜにして
沖縄の味を彼を想いながら愉しんだ

きっと芭蕉の花は大きな実りをつけるだろう
芭蕉翁はこの花と葉をどう感じていたのだろうか
カタンカタンと芭蕉布は揺れた

今日は特別な日
お母さんが うんとお化粧をして
スカートをはく学校にやって来る。

シーンと静まり返った教室
今日の先生の声は優しく美しい
後ろでお母さんの目が光っている。

『手をあげるんだ！』と
ぼくが ぼくを励ます。
でも、指名されない。

『もう一度、勇気を出して！』
苦手な本読みがあたった。
いつもより大きな声でゆっくりと本を読んだ。

先生とお母さんが
「良くやったね。」と微笑んでいる。
終わりのチャイムが 心地よく響いた。

夜の美德には忠誠がありません
眠らなければならないからです
眠る男にも忠誠は保たれません
夜には新しい秩序を見出します

眠るルイ十四世を考えてみても
美しく正しい者にはなり得ない
大切な思想のしるしを残しても
最も優しいものが実は最も怖い

夜と共にやって来るのは平和です
昼の疲労が仕掛けた疑いを晴らし
真に美しく正しい者への招待です
悪者の中にあっても平穩のしるし

人が仮定するのは他人を許すこと
そこから出来るのは祈ることです
両膝を曲げる動作にも疲れのあと
頭も又低くなると気付くことです

祈りにも疲れを感じる様になり
全ての思考に夜がやって来ます
思考の中に眠る術が必要になり
熟練を恃み自ら思想を破ります

竈や囲炉裏で火を焚く煙
が外へ漂い出る時代に
草葺屋根の家の庭をこっそり歩く
爪が異様に赤くて
家に入ると火事になる
と言われた不吉な気配のベンケイ
海辺に近い田圃を護る石垣の
崖に棲息していた
黴菌の塊でも口に銜えている
ような汚く醜い顔のボロタ
誰にも好かれなかった蟹たち
好かれなくても
爪を使って生きる暮らしはあったのに
いつの間にか消えている
運命の予定であったのか

村の昔を懐かしむのはもう止めよう
戦争を知らないものに
戦争の話をするようなものだ
陸に棲んでいた小さな蟹の消滅なんか
大昔から途切れることのない
時の流れの中では哀れ
を誘う物語にもなるまい

窓際のカーテンが
小さく動く

ザワザワ ソワソワ
ジュザ ジュゾジュジョ
音はしないのに 音を感じる

カーテンの裾を上げると
齧りつくように
釣られ 吊られて 揺れ落ちた のは

瞬間的に手を放し飛び退いた
墜ちて
音のない音が
もっと響いた
ジュロジュジャ ジャジョソワ ジョワジョワ

尖った頭には鋭いハサミ
幾つもの節がつながった胴体
胴体に嵌め込まれたような
百本の足

ウ ゴ メ ク ウ ゴ メ ク
ウ ゴ キ マ ワ ル 百の足

悲鳴を上げたら
大きな男が跳んで来てくれた
目の前で のたうつムカデに
手が出せないと知り
先ず踏みつけたが

蟲はますます暴れるばかり
百の足をのたうたせ のたうって

男は助けの警備員を呼んだ
まだもがく虫をちらりと見た女性警備員
塵取りを持って来て
そのままひょいと 掬い
窓を開けると下の草むらへ
ポン！ と捨てた
嫌な顔もしないで

熊野古道の

石の
みちしるべ
道標 に

ちよこんと

鎮座している

雨蛙よ。

おまえが

わけのわからぬ

衝動から

自分で

そこまで

這い登ったのか

それとも

行きずりの誰かが

戯れに

おまえを

そんな

孤独な高みに

置き去りにしたのか

そいつは

わからんが.....

この

青い

聖なる森を訪れる

旅人は

必ず

雨蛙よ

おまえを見る。

とはいえ
それは
彼らの進むべき道を
おまえが
知っているから
なのではない。

彼らが見るのは
実は
道標だ。
だが
その上に
おまえがいることで
彼らは
改めて確信するのだ。
ここが
聖なる森であること
おまえが
その生ける使いであること……

そして
雨蛙よ
おまえが
そこへと
自分で
這い登ったなら
その
衝動のうちに
それとも
誰かの
戯れなのなら
その

気まぐれのうちに
既に
聖なる森の
〈神意〉は
ひそやかに
働いていたことを。

道を確認め終えた
旅人は
立ち去り際
雨蛙よ
おまえに
一礼する。

感謝？
だが
その受け手は
おまえなのか？
それとも
おまえを
そこにあらしめ
旅人をも
また
そこにあらしめた
おまえを
旅人を
そして森すべてを
包み込む
見えない
誰かなのか？

みずいろのところに
空をうつして
忘れてしまった涙をあつめて
夢のしずくを
葦の翳は淡く
水面にうつる
水鳥の姿が水輪に割れて
さわさわとなる岸边

雲の行方に明日の水脈をたどり
にびいろ
鈍色に光る水鳥の羽
消えた過去
遠くの山々の稜線から
静かに翔び立つ薄煙り
人家の跡をしみじみとしのぼせて
ゆらゆらとゆれる
みずいろのところに
水玉模様の光の輪が
幾筋も水底を揺曳(ゆら)して

倒立の世界を描写する
山も川も丘も木々も
みずうみに浮かぶ新しい国
透明に写し出されている
ここは水面の中の天国だから
誰も行くこともできず
誰も帰ることもできない
みずいろの舟が走り
浅瀬に戯れる小魚の群れに
空の果てを写している

水との境界線を透して

みずうみの青さをゆらめかして



三浦 逸雄 「ドライフラワー」 12号（麻布 油彩）

もはやあれから五〇年も経ってしまったが、一九六二年の暮れか六三年早々にかけての冬の深夜だった。友人の山崎君が運転するパブリカ八〇〇ccが、開通されたばかりの国道二四六号線を疾駆していた。

二四六号線といえば、今でこそ代表的な渋滞道路だが、このときは田園地帯をハイウエーが一本通っているだけで、周辺は丘々が連なり雑木林と畑ばかりがどこまでも広がっていた。そこを空冷エンジンをいっぱいに働かせて、パブリカ八〇〇がひたすら西を目指して走っていた。

「ちょっと前の車ヘンだぞ」山崎君がすっとんきょうな声を上げた。

「あのタクシー、運転手が居ない！」

いつのまにか前方にタクシーが一台走っていて、そのタクシーに人が誰も乗っていない、運転手さえ居ないというのだ。運転席の脇の座席を“Suicide Seat”（自殺席）というらしい。わたしはその自殺席でのんきに座っているうちに、眠気を催してぼうっとしていたのでタクシーの存在さえ気付かずに居た。

しかし山崎君のただならぬ様子に眠気も吹っ飛んで、じっと前方を見るとタクシーが猛スピードで飛ばしていて、座席に人影らしいものが見えなかった。それがはるか前方で確認できない。しかもそのタクシーは「トヨペット」で、パブリカよりも馬力がある。赤信号になるとかなり接近できるが、信号が変わるとたちまち引き離されてしまう。

「思いきり飛ばして近づいてみるからよく見てくれよ」山崎君がそういうとアクセルを懸命に踏み込んだ。パブリカが唸りを上げてトヨペットを追う。最短距離に近づいたとき、われわれは言葉を失った。たしかに誰も乗っていない。

このとき、このタクシーが左折でもしてわれわれの視界から消えていたら、まちがいなく幽霊タクシーを見たとしても信じていただろう。ところがこの謎がずっと解けたのである...

どのくらいこのタクシーを追っていたのだろうか？やがて対向車が現れて、ライトが前方から当たると、タクシーの運転席にはっきりとシルエットが浮かび上がった。運転手の存在があっさり確認されたのである。

それでは何故後ろから追っているときは見えなかったのか？この当時のタクシーは運転席の後ろにガラス板を張っていたのだ。この時代横行したタクシー強盗に対する防御策だった。そのガラスにこちらのヘッドライトが反射して運転手が見えなかったというわけだ。「幽霊の正体見たり枯れ尾花」の典型例かもしれない。

話かわって、伝統ばかり立派なある中学校でのことだ。学校の校舎というのはただでさえ、妖気の漂う感じのするものである。まして古い学校のことだ、幽霊のひとりくらい棲んでいても不思議はない。

特別教室棟と呼ばれる専門教科用の教室ばかり集めた教室棟があった。とある夕刻のことだ

った。その階段の踊り場の窓から外を見ると、なんとそこにキリストが立っているではないか。と思った次の瞬間、美術の上田先生がウサギのえさにする葉っぱを摘んでいるところだと気がついた。西日をいっぱい浴びて長髪が金色に輝き、彫りの深い横顔がなにやら憂鬱げに俯いて、キリストに見えたのだった。絵の具のついたスモッグ姿というのも効果的だった。

同じく特別教室棟の階段、たしか二階から三階へ上る途中のことだった。秋深い頃のほの暗い夕刻、あと一段で階段を上り終わるといふとき不思議な体験をした。そのときは異様な雰囲気、まさに魑魅魍魎がトウセンボしているような緊張感に包まれていた。目では明らかにもう一段階段があることを見ている、ところが頭の中では一番上に到達したと決めてかかっているのだ。するとどうなるかという、階段がもう一段あるのに一番上に着いたということで足は上に上がり、真っ直ぐに前に出ようとした。当然階段にぶつかって前に転ぶのである。頭の中と体の動きが切れているのだ。

なにを下らないことを言っているのだ、おおかた血圧でも高くてふらついていただろう、とそんな風に言われそうな気がする。しかし後にも先にもこんな経験はこのときしかなく、身にただならぬ妖気を感じたこともたしかなのだ。物の怪とかいうものがこの世にあるとするなら、きっとそんなものがすぐ傍に居たに違いないと思う。

その足で3階の理科準備室に行き、刃物を研いだ。よく研いだ刃物を持って階段を降りるときは、すでに妖気はまったくなく、自信に満ちた足取りで階段を降りて行く事が出来た。普段の状態を取り戻していたのである。

お次もやはり特別教室棟でのことである。四階に合併教室と呼ばれる広い部屋がある。音響設備が施してあり、簡単な音楽会など出来るようなステージもある。

とある三月のある日、雲の低く垂れ込めた暗く寒い日だった。春休みで人っ子ひとり居ない深閑とした校舎の一番奥深く、この教室へ来る途中から妙に滅入るような重い気分だった。獣の妖精が跋扈しているようないやな気配に包まれていた。このときは一人ではなかった。電気工事の業者が、簡単な修理で来たのを案内していったのである。

ドアの鍵を開けて教室内へ入ると「ボアーン」という大きな音がした。壁にかかった八個のスピーカーが一斉に鳴ったのである。“ハウリング”と称するマイクから拾った雑音を増幅させて出る音である。

いつ誰が使ったのか分からないが、前回この部屋で音響設備を使った者がアンプの電源を切らずに帰ってしまったに違いない、だからマイクが生きているのだ、そう即断した。ただちにステージ脇の調整室に行ってみると、アンプの電源は切れており、マイクは片付けられていた。

この瞬間「出た！」と思った。一緒に行った電気屋さんはこの異常さに驚き顔面蒼白だった。「ここは時々妖怪が出ますよ」と余計なことを言ったのがさらにいけなかった。明らかに彼はおびえていた。

わたしはステージに上がり、ピアノの蓋を開けて激しく弾き始めた。ただただわたしはピアノ

を弾きつづけた。どのくらいの時間弾いていたのか分からない。その間気を取り直した初老の技術者は修理を始め、ドライバーとか七つ道具を取り出して仕事を進めた。そうこうするうちに修理が済んで、道具を仕舞い始めたのでわたしはピアノを弾くのを止めてピアノの蓋を閉めた。

そのとき二人が部屋に入ったときとまったく違った空気になっていることを強く感じた。妖気漂う何とも重い空気が一掃されて、ごく普通のいつも通りの空気に戻っていたのである。

今でもこのときのハウリングは何だったのだろうと考えると、ただ不思議というよりない。この特別教室棟には妖怪のたぐいが棲んでいるのだ。そう思うしかない、という結論に近づくと少し安心できて落ち着くのである。

妖怪を鎮めるには、よく切れる刃物を身につけるか、楽器等音の出るものを叩くのがよいという説がある。その説を忠実に実行した、そして妖怪を鎮めることが出来た、そう思うといささか得意である。〈完〉

第一章

トゥールから北西部地方へ向かって行くと、風景が雄大になります。植林された広大な窪地が幾つもあります。そして、見ると二〇又は三〇キロメートルの処に、より一層殺風景な稜線が発見されます。大砲は遠雷の様に私たちの前方で轟いています。私たちはトゥールからその音を聞いて来ました。それは私には一種の雄弁に過ぎませんでした。私たちの内では、誰も戦争のことは何も知りませんでした。私たちとは六名の志願兵でした。その他には、前線の馬小屋よりも向こうへ行かなかった馬の担当者たちがいましたが、彼らは最も不条理でもジョアニーの新しい陣営へ定期的に戻って行きました。一九一四年十月の初めでした。戦線は、我が軍が優位だった戦闘後に、この地方で膠着した処でした。そこでは我が軍がフランス西部へ推し進めていました。しかし、私たちには何の考えもありませんでした。単にゴンティエは、道の右と左の土地を示して私に言いました、「我々の砲兵中隊はこの辺りの何処かにいる様だ」。私たちがそれ故に美しく並んだ木々で飾られた様な遠くの稜線の背後の敵に想像していたのは、その木々の中に大きな突破口を見ることであり、そしてその突破口から葉巻の形をした気球が姿を現すことでした。私はこの種の不気味な砲眼を窺っていました。ところが私たちは多くのことを間違えていました。この脅迫的な地平線は、何ヶ月もの長い間私たちの足許を止めた儘でした。私は戦争の匂いを嗅ぐ前に、四頭の馬を手に入れて再び行軍しました。正午に休憩となり、或る村で食事になりましたが、そこで私は信じられない位に多量の薬莖を至る所に見付けました。そこで知ったことは、私たちの銃は銅の色をした弾丸を発射していましたが、弾丸の先端は尖っていて、後方は少し細くなっていたのです。この先端は私には奇妙に思えました。愚かにも昔からの短刀の形を模倣していたのです。そこで土木局にいたゴンティエと一緒に私たちが始めたことは、弾丸に相応しい形についての際限の無い議論でした。私自身は力学や物理学の素人でしたが、そのことに関しては十年以上も前から、細くなった後部と一緒に先端が半円球の砲弾が良いと理解していました。私は機関車の風切りに関しても小さな記事を書いて嘗て嘲笑したことがありました。しかしその代わりに私は、学者ぶった人々との昼食時に、ふっと砲弾の話进行思いついた理工科学校出身者の一人によって嘲笑されました。彼は私に言いました、「まるで全ての状況が分析によるにしろ、経験によるにしろ、大変細かくは研究されて来なかったのです。あなたは様な速度を前にした空気の抵抗に関してご存知なのですか……云々」。これらの思い出から私は、後部を少し細くしようと試みた弾丸を、私の指の間で逆にひっくり返していた時に戻りました。この事例やその他の幾つかの事例によれば、私は理工科学校出身者やこの種の人々に少し驚いたものです。その状況を捉えるのは困難です。しかし私は他の状況のために行うのと同様に、その状況を大胆に捉えました。何故なら、決して疑う術を知らないこの知識は、古代の奴隷の身分を一新する様なものであり、王と臣民の間の人間世界の分配を一新する様なものであると私は感じていたからです

。砲弾については私が正しかったのです。今では最早何の疑いもありません。私が思うに政治についても私は正しかったのです。しかしここでは情熱が経験を曇らせます。ゴンティエは、十八歳から二十歳まで山岳鉄道を建設した人として当然の様に、偉大な免許所有者たちを殆ど信用していませんでした。彼は臆することも無く、全幅の信頼をもって私の言うことを聞きました。その様にして年齢に相応しい大人たちが常に生まれたのです。そして、私は物事の真実のみを絶対的に考察する明白な観念に倣って、失敗した問題について反省する誰かの様に推測します。但し、彼は裕福な暮らしをしているのですが、私は習慣の中で未だに未知の真実と過去の真実との間で如何なる区別もしませんでした。両者の場合、方法によって私の意見は独自でした。私たちが百回言った時に立証されますが、私は単なる一兵士に生まれました。そして、私はまさしく私の報告に関して実際に実験するに至りました。それは私には嬉しくて堪りませんでした。私は、それから東洋の独裁者になっていった理工科学学校出身者を探しながら、四頭の馬を一本のロープで繋ぎながら道に戻りました。

この物語は熟考によって書き加えられる様になるのですが、私はそれを心配しています。一種の告白が期待される様なことはありません。私はそんなものを憎みます。私は、生涯の誤りの全てを語る事が有益であるとは思いません。私は、激しい情熱で謂わば大いに戦っていました。そして理性の術策によって償いがたい不幸から身を守っていました。苦境に陥っている誰か他の人にとっては、その点に関して知る事は良いことです。私は武器の如く私の理性を常に磨いて光らせていましたが、それは私の安全のためでもあります。鎧と同じ様に真正なこれらの理性の部分は、取分け一度ならず私を救済しました。しかし、誤りは忘却に捧げられました。それは理性の誤りを除いて、誤りが当然受けるべきものの全てです。戦時では全生涯が広がって、公的になる仕事において私は好意的に判断されていました。しかし私の眼には、患者としての本当の顔付になることが一度ならず起きました。かくして私は、権力をより良く判断することを覚えました。私が話した不気味な稜線について、私は『マルス』の全章に書きました。十六年後又は十七年後に、新たな経験をそこに再び書くことは何も無い、と私は理解しています。しかし厳密でなく又厳しくもなく、物語の動きとしてもっと身近なことを今後は言うべきです。そして第一には利害を離れて私の楽しみから言うべきです。

道は長く、私の当初の好奇心は麻痺しました。馬の運搬人たちの任務が終わる休息になると殆ど私は、人間と馬との選別を行った下士官たちが私たちを送り出した場所に大変な恐怖を抱いていたことには気付くことが出来ませんでした。人が遠くから抱いていて私が時々その後感じたこの恐怖は、本当の多くの恐怖と異なっています。しかし、この恐怖もやはり辛いものです。ですが行動を妨げない以上、この恐怖は自然に消えます。私が見ることが出来た様にその様な人間が、大砲のもう少し近くで恐れる唯一の時間を絶えず取除いて馬たちを大胆に調教します。そして、もう一つの範囲の内のこの恐れは、一つのことならず多くのことを説明しています。この範囲とは略式裁判や情け容赦の無い罰の場所です。ここに私は、馬たちと干し草とそれとは別種の食糧補給に忙しい頑健な人々しか見ません。それは全てが正確に、そして絶えず繰返される恐

怖の圧力の下で行われます。そんなことで私はこの種の心配と不変の思想を認めていましたが、それを正確に言うことは出来ません。しかし私は待つ視線を所有しました。私は、戦争に最も優れた人間や戦争に最も優れたしるしを待ち伏せしました。その視線の中で私は何か新品のものを見た様に思います。それは軍人たちが通常は殆ど見せないものです。多分、私たちに対する一種の同情であり、彼ら自身に対する同情でした。その後私は騒音の手の届く処にいるが、銃撃からは手の届かない処にいる軍人をより良く知りました。彼にはより遠くへ行く人々が信じられないのは非常に驚きです。彼は、彼らを容易に英雄と見做します。恐らく羨んでいるのです。私は、無言で謝るこの善良のしるしを更に感じました。その善良さは、もう少し遠くでも認められますし、その他に瀬戸際にいて度々脅される連結具の人々にも認められます。これらの感情は名誉を閉じ込めていますが、その他の人々にも達する名誉です。しかしながら恐怖への回帰によって、それと同じ人々が逃亡したことで告発される者を軽蔑する様に勧められます。これらの感情の領域は、実際の戦争の回りに配置されていて、どんな人も読む偉大な書物の様に創られています。

私が到着した丁度良い時に、手厚い一種の歓待が始まるのを見ました。私が既に感嘆して見る機会を探していたのは本当です。しかしながら私が知ったのは、この状況の中では騙されるよりも寧ろ明らかにさせることです。兎に角、私の考えがこの村で、私の知らなかった誠実な色調を理解したのは事実です。多分、感染することによって私は左程静かでない時間におりました。私たちは霧で暗闇の中に再び降り始めました。他の上官たちは私たちを急がせました。地面は平坦でなく泥だらけでした。馬たちは引っ張られていました。夢の中の様に大変に速く私たちは、半ば崩壊したマンダルの大きな村を通り過ぎました。そこは火事と腐敗の匂いが発散していて、私たちは森の方へ回り道をしました。そこを通過する時に、誰かが私たちに馬の陰に隠れる様に知らせました。そこは一寸した恐怖の時だったのです。一週間後に私は、大変奇妙なこの忠告を実感する羽目に陥りました。

この警告の後、私は幻想的な物語の中で生活している様でした。森の縁で僅かな蠟燭で照らす野営は、奇妙な外観を与えます。私は絶壁や幾つもの洞窟を見た様に思いました。一度ならずその場所を見直しました。けれども一度も私の最初の印象を認めることが出来ませんでした。そこから通常は進路を良く見出しますけれども、恐らく真昼でも何時も道に迷った様なことが起きるのです。恐らく全ては最初の入口次第なのです。そしてその晩に、私は電話線を見失いました。屈辱的な挿話から勇気も少し失いました。ひげを生やした上等兵が、恐らく私の肩で燕麦の袋を上手に運ぶために私を連れて行きました。ところが私は燕麦の袋を上手に運ぶことが出来ます。そして、もっと重い物も運びました。しかし肩で燕麦の袋を一杯にする単純な試みは、一瞬に或る人の判断で行われることなのです。袋を運ぶことは上等兵が言ったことだったのです。私は、ジョアニーの曹長が「馬はあなたの仕事ではない」と私に言った時に既に思った様に、私は戦争に向いていないと思いました。私がその次に覚えたのは、軍隊の管理が完全に人間に奉仕させているのを知ることです。かくして私は五つか六つの仕事を行いましたが、それについては上出来でした。

私は野性的で自由な生活を二日間送りました。料理で使うために枯木を探しに行きました。そして私はゴンティエと一緒に、葦で覆われた二、三軒の小屋で探し始めました。書状は一通も届きませんでした。そのことだけでも全てを忘れました。私は大地と木々に書かれた特徴しか読みませんでした。私の思考はそれ以上遠くへ行きませんでした。どの様にしてそれ以上遠くへ行くのでしょうか。人間は知覚せずに思考を組み立てられません。しかし、私は上手に読む術を知りました。そして私にとって十分に新しい特徴を極めて容易に読みました。それは一個の砲弾です。既に特有のもので、大変に威圧的で、腕の半分程の長さで、重くて固そうでした。この物が落ちていそうな場所を探しながら、その時私を前夜に目覚めさせた野生の鳥の様な一種の叫びを理解しました。私はこの物体の速度と人間の集団と出合う時に生じるかも知れない結果を大変良く理解したのです。その晩その物は、偶然にも沢山の木々から私は抜け出していたので、すっかり燃えている稜線と形をなしていない廃墟を見せました。「燃えているのはボーモンだ」と私は言われました。翌日、私はM少佐の前にいました。彼は有名で、イマージュ通りに似ていた立派な騎兵でした。彼は私をそこに見付けて満足そうに見えました。そして、その他の志願兵の一人である部下のWと共に、電話交換兵になることを私に指名しました。「稜線づたいにボーモンへ北上すること。あなたはそこで五時に私と落ち合うこと」。同様に志願兵でも階級は上等兵であったゴンティエとの大きな落胆は、馬たちと一緒に森に取り残されていましたが、私たちは葦の小屋とロビンソン・クルーソーの生活にさよならをしなければなりません。私とWと、のっぽで痩せていて歌う様な声をしているリシャールと名乗る者と三人で、畑を一直線に横切って出発しました。このリシャールは突然に現れました。皆が彼の名前を知っていましたが、誰も見たことがありませんでした。不在でした。兵營で彼の身分について言った時、誰かが「クリーニング屋」とか、その種のことを答えました。彼の名は志願兵一覧にありましたが、名前を呼ばれても何時も不在でした。軍隊列車の中で、馬たちや秣の束の間を探しましたが、無駄でした。彼はトウールで降りませんでした。森の中で彼は名前だけでしかなく、噂だけの人でした。今やっと存在したのです。彼は全員が知り合いであるが如く、挨拶や機嫌が良い口調で会話を始めました。やがて彼は、未だ目新しい砲弾の幾つもの穴に驚いていました。上空を凝視して、他からも砲弾が私たちの処に落ちて来ることは十分にあり得ると結論付けました。全く海にいる〈パリ人〉の様でした。実際に彼は〈パリ人〉であり、森の中の労働者になりました。ところで何と彼は、軍楽隊が演奏する時のクラリネット奏者であると語りました。私は間隔を置いて再び彼に会いました。私たちの会話は、「詩人と農夫」や「ファウスト」やその他のコンサート作品を、クラリネットや私を気にしながら低音の演奏をすることにありました。彼は不在のため演奏の仕事を継続していませんでした。というのも、素晴らしい結果を挙げた孤立しての非常に危険な監視所に何ヶ月も過ごしていたからです。そこには彼と同じ仕事をしていたビジャールと言う名の人と一緒にいました。そして、ビジャールは彼に普通に聞きました、「リシャール、あなたは結婚しているのかい」。相手がそうであると言った時に、ビジャールはつけ加えて言いました、「あなたは妻を寝取られた男だ」。彼らは最後には殴り合いになりました。私は彼らと一度か二度、彼

らの隠れ家で会いましたが、美味しい野菜スープを出して貰いました。何故なら彼らは庭で栽培していたからです。そしてリチャールが言った様に、その時は大変に楽しく、いつの間にか自然と夜になりました。その場所はマルヴァザンと呼ばれていて、不気味なリュ・ド・マの向こう側にあり、我が軍の軍事行動からは極端に左側にありました。この監視所に将校は一人もおりませんでした。弾丸の音が鋭く鳴っていました。しかし、この一隅は次第に忘れられていたとも言わなければなりません。左側はコメルシーやサン＝ミイエルへ至っていました。そして我々の大砲は先ず西側へ向かっていました。それは以前の戦闘へ向いていたのですが、少しずつ北へ向けていました。我々の戦術の中心と発砲と煙の地点は当然であった如くまさに百八十度以上ありました。従ってリチャールは敵の側面に十分に進んで、如何なることも考慮に入れずに興味あるものを幾つも見ました。三ヶ月後に、彼は作業場へ戻されました。そこは小学校並みの一種の理工科学校でしたが、彼には自分の職務に対して勇敢でした。彼は言いました、「畑を真っ直ぐに通るのは何て楽しいのだろう。小麦や乾草の山の中にいる赤いズボンを穿いたこれらの不幸な人々は何故埋葬されないのだろうか。勿論、面倒なことは分かる。でも、彼らは砲弾を幾つも運んでいるのである」。私はこんなにも穏やかな人間を見たことがありませんでした。もしも彼と、政府や同盟や公式声明や勝利のことを話したなら、彼は大変に驚くに違いありませんが、何時も非常に礼儀正しくそして向学心を失わないことを望んでいます。私に分かることは、これらの問題のことを話す彼の考え方は少しも私に伝わらなかったことです。何時も「ファウスト」とか「詩人と農夫」でした。幸福であることを誓った人間には些細なことではなければならないことなのです。

既に述べたことで終わりにしたいと思っていました。その上、私は日付けを思い出すことが出来るノートを持っていませんでしたので、年代順の表記は無視します。その様にして私は何の心配も無く、そして巨大で忍耐のいる仕事が有益な成果を生む作家ノルトン・クリュの雷鳴の危険に身を晒します。私がやりたいことは大したが無いのでしょうか。恐ろしくて信じ難いことがあっても、私は何も語るべきことはありません。私は砲兵隊の電話交換兵として参戦しました。私は仕事で危険を冒しましたが、それはデカルトやテュレンヌ(1)の時代の戦争が何であるのかの概念を少しは私に与えました。私は危険や冬の長い兵営に関しては理解しています。この戦争で沢山のフランス人たちを見ましたし、私が如何に彼らを見ていたのかを言いたいと思います。何も捏造していないのは極めて確実です。その上、風刺的短文や道徳的批判のどんなものでも放棄します。私の風刺的な短文は書かれますが、私が望んだ様にあらゆる話から分離されて区別されます。そして今ではここにある話は、如何なる風刺的短文の意図はありません。私はこれらの頁を一九三一年に書いています。戦争に反対して戦いながらも、その側面を目的にしているのだと私は思います。別の何かがあるのでしょうか。勿論、戦争ではありません。決してどんな戦争も繰り返さないのが唯一の理由になっているからです。私が語るのは過去のことです。当時のことを良く理解するためには、数年間の適当な時間が必要です。そして多分、忘れていたこともあると思います。(完)

(1) テュレンヌ (一六一一～七五) は、三十年戦争で神聖ローマ軍を、フロンドの乱でコンデ公を破った名将で、戦略家で名高い。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

金 得永（きむ どうくよん）

一九五六年大韓民国全羅南道新安郡生まれ。木浦、光州、ソウルで海を故郷に宗教に傾倒しながら育つ。一九七九年、光州教育大学を卒業。一九九一年、日本奈良教育大学大学院修了。一九九五年檀国大学校教育学博士号（日本研究）を取得。二〇〇一～二〇〇四年、日本の岐阜韓国教育院長に派遣勤務し、『古代からの韓日交流の歴史』出版。その後、『日本生涯学習都市フロンティア』、『日本の生涯学習まちづくり論』、『人性千字』、『教師のためのソ-シャルスキル』、『生涯学習まちづくり論』などを韓国で出版。二〇一五年から日本東京韓国学校の校長として赴任。子供たちが幸せな世の中、教室の中の幸福条件を整備中。目に見えない教育にも力を尽くしている。休日は、日韓古代史を中心とした神社や寺院を巡礼。古代人と、自然との対話を試みている。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年

度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忠詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。個人誌「パープル」（一九九六年～二〇一七年）、一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのpapier）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『文明国の戦争で真の原因になるもの』『神々』『神話序説』『家族感情』『わが思索のあと』『思想と年齢』『人間さまざま』『心の冒険』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺
二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努
力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『
永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達
した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半に
かけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、
一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄
高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニ
アス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。
帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

読者からのコメント（2017年5月号）

アラン『わが思索の後』（三十四・最終章） 宗教：神仏のことは、よく分かりませんが、いろいろな現象を見てきて、確かに存在していると思っています。畏敬の念を忘れてはならないと思っています。慎重さと友情で溢れた『神々』の長い序文をありがとうございました。理解力が乏しくてすみません。

壊れゆく理性：人間は不完全なものだと思います。問題を抱えながら、理性によって犯罪を起こさずに生きているように思いました。

三浦逸雄の世界（十八）「午後の室」：絵を拝見するだけでほっとします。

静物：美の極地は廃残の劣悪の秩序にもある。真実の感動は無造作の老残の図にもあるか・・・私には難しく感じました。

万葉集：万葉集には、好きな短歌がたくさんありますが、終連のことは知りませんでした。日本に亡命した百済人のことも万、万葉名のことも。百済を詠んだ歌が二首あることを知りました。

砂の暗号：現代の人間を表現されていると思いました。

成熟を説く人へ：人間だけが許されている情操。健全な精神には成熟が必要と思いました。

列車の中：2連の、雪原の情景が美しいですね。軽井沢の雪原に、国鳥のカササギを思い浮かべ恋しく思うところがいいと思いました。

出口：日々の暮らしは、退っ引きならぬことにも突き当たりますね。家族が病魔に苦しんで地獄に落ちても、助けることもできず祈るばかりです。

Tよ：短歌のお仲間のTさんが若くして亡くなられ、Tさんの遺歌集をみなさんで出してくださいという。Tさんも良い方だったのでしょね。みなさんの思いやりに感動しました。

泣く女：泣きだした女に、思い遣る言葉がけが欲しいですね。現代の世相が見えるようです。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)
第35号 (2017年6月登録)

<http://p.booklog.jp/book/115166>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)
担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/115166>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト